

42 破天荒

令和 元年度版
創刊
第二十二号

2 学期が始まります

暑い暑い、夏休みが終わりました。暑いを通り越して、ひよっとしたらやる気をそがれる日もあったかもしれませぬ。が、まだまだ道半ば。目の前が苦しいと感じながらも、目の前の課題に挑戦していきましょう。二学期は、体育大会に始まり、各部活動とも、新人戦が控えています。行事としては、相高生フォーラムがあり、そして、四十二回生の最大行事である修学旅行が控えています。高校生活の最高の思い出となるように、個人を成熟させて、集団として、当たり前前の成功(体調管理も含めて)を手に入れるよう、各々が、「いまの自分」としっかりと向き合い、この二学期を、自分を成長させる機会にしていきたいと思います。暑さに負けず、しっかりと頑張りましょう。

破天荒第10号より

もう一つは、今年度全国高等学校野球選手権大会に参加していた石川県の星稜高等学校のことです。今夏の全国大会では、二回戦で球史に残る大逆転負けを喫しました。多くの一、二年生を擁したチームですが、これだけの大逆転を経験すれば、前を向こうにもトラウマとして残っても仕方ないだろうと思います。これほどの中でも、どう前向きな気持ち、行動を取っていくのかと思いつきながら、小林さんの話と共に、星稜高等学校の監督が、敗戦した後のミーティングで選手に対して唄われた唄を思い描きました。

もうすぐ今日が終わる やり残したことはないかい

親友と語り合ったかい 燃えるような野球をしたかい

星稜高等学校は、秋の新人戦で北信越大会優勝を果たし、明治神宮大会という全国大会に出場しました。圧倒的な力を見せ、ここで優勝を果たし、選抜を迎えるのかと思つたら、決勝はエースに投げさせることなく、チームに更なる試練を与えておられました。

【破天荒第 10 号 (12 月分) より】

第 101 回の夏の結果だけでなく、第 91 回の選抜大会前後のことは、皆さんもよく知っている通りです。星稜高校が決勝戦に進んだとき、一瞬、読み通りの展開になったと、疚しい心が顔を覗かせましたが、私が本当に皆さんに伝えたかったことは、「努力は必ず報われる」ということだったのか、「努力に費やした時間は必ず自分の大きな勇気になる」ということだったのかを、改めて考えました。

昨年一番悔しい思いをした、星稜高校野球部員たちが掲げた目標は、いつ如何なるときも

「必笑」

でした。チャンスでもピンチでも、勝っても負けても。見事に一年かけて、昨年の自分達を越えていっていた彼らの努力は、確かに自分達に大きな勇気を与えたと、実感しました。

ただ、あるタイミングで、エースの奥川君が涙を流した場面がありました。智辯和歌山戦終了挨拶直後の校歌斉唱のときと、決勝戦終了後にダグアウト上のスタンドを見上げた後でした。「やはり、高校生」と邪推しましたが、前者は自分を貫き切れたことに、後者は中学時代の恩師に掛けられた労いに対して感極まったようです。

勝負を超えて手にした、かけがえのない宝物を、人生の大きな糧にしてくれることを応援したいですね。

また、同校 OB の松井秀喜さんは、

「監督を含め、今までの星稜高校の歴史を変えてくれたと思います。101 回目の甲子園で何か新しい歴史が始まる感じがしました。

監督についても、(謹慎の)2 カ月間、野球を離れて、自問自答し、新たな出発をしてここまで来られたことは、素晴らしいですし大きな財産になったと思います。でも、ここで優勝できないのが、星稜。母校のそういうところも大好きです。何か新たな宿題が残った感じですね。また、新たなチャレンジをして全国制覇を狙ってもらいたいですね。

ただ目標は全国制覇かもしれませんが、星稜高校野球部のモットーは、あくまでも、野球を通しての人間形成です。それが、校訓である『社会に役立つ人間の育成』につながっていくと考えています。

後輩たちにたくさん感動させてもらいました。監督はじめ選手の皆さん、本当にお疲れさまでした。そして、ありがとうございました。」と、コメントを出されています。

学ぶべき内容、相手、時期は、学ぼうとする人の心に宿っているものです。あなたたちも、我々も、その心を忘れず、日々を大切に積み重ねていきましょう。

一方 夏休みの間も42回生を取り巻く 入試情報は一刻一刻変化しています

7月全国大会 (進研模試) の結果から

8月初めには7月模試の結果が返ってきました。各自すでに、Benesse マナビジョンを通じて結果を確認し、復習を進めている人もいます。

42回生は、1学年の「総合的な学習の時間」で、従来の進路学習と異なる形で進路学習を行った分、担任の先生を中心にして、1学年最初の進研模試から、下記左の一覧表に示した内容を伝え、理解させ、指導をしてきてもらっています。今回4度めの進研模試になりますが、生徒達は、下段表の数字から見られるように、私達が意図することを理解して、進路情報を得てくれています。

さらに工夫できることとしては、第四志望を自分の現実（良い判定が必ず付く現在の自分の立ち位置）を知るレベルに使ってもらいたいものです。

良い判定から感じる次へのモチベーションと、4つともが E 判定の結果から沸き出るモチベーションのどちらに、自分の前を見る力が継続的に発揮できると思いますか？

現実から、自分のいるべき当たり前のレベルを意識してもらいたいものです。

そして、本当に自分のいるべき立ち位置を得るべく、自覚を持った努力を始めてほしいと考えています。

「今でしょ」を、あと何回言われて目覚めますか？

求めよ。さらば与えられん。叩けよ。さらば開かれん！

と、私達は叱咤されました。

将来振り返ったとき、ここが「今」であるとよいですね。

志望校記入の考え方(42回生)

第一志望	ここには、自分が本気で目指している大学を記入すること。良い判定が出るどころではなく、本当に行きたい大学であること。国公立大学が望ましく、学部学科もきちんと記入すること。
第二志望	ここには、良い判定が出ると思われる大学を記入すること。国公立大学が望ましいが、現在の学力で事実を知るという意味で記入すること。そのうえで、今後の努力の方向性を知ること。
第三志望	ここには、私学で目指してみたい大学を記入すること。第一志望と同じで、良い判定以上に、行く可能性を持っている大学であること。
第四志望	ここには、自分がこれ以上目標を下げたくないという大学を記入すること。国公立大学でも、私立大学のいずれでもよい。

すべては、受験生の学年で、志望校を目指すための学力を高める時間を少しでも増やすためです。そのためには、しっかりとターゲットを定める一年にすることが、本学年での最大努力目標となります。

まだ一年、あと一年。まだ一年では、いつの時期でも「まだ（ ）」と逃げていく人間になります。

誰の進路ですか、誰の人生ですか？理想だけでなく、自分を知り、自分を高める努力をして下さい。

数字は生き物です。一喜一憂しすぎるわけにはいきませんが、一番の根拠になるのも数字です。

その数字が、自分にとって根拠を持った勇気を与える数字になれば、日々の積み重ねをすることの勇気が強いものとなり、難しいと感じた問題に、すぐ諦めることなく何度もチャレンジできるようになります。

42回生はそのことを理解して、今の力を計る志望校情報から、より高みを目指してくれていると思います。

次にやるべきことは、本当の実力をどう身につけるか。それには、言われたこと以外に、自分の意志で何をやり続けるか、ということです。

「いつかやる」、「次は頑張る」は、魔法の合言葉でも何でもありません。11月模試からは、地歴公民、理科が加わります。国数英が太い柱になってこそ、加わる科目が活かされます。

日々の小さな努力を怠らず、増えた科目を大きな武器となるよう、闘いの武器を増やしていきましょう。

志望校記入状況(42回生2年7月)

分類	第一志望	第二志望	第三志望	第四志望	計
国立大	86	71	35	25	217
公立大	61	37	22	14	134
私立大	39	81	132	143	395
大学校	1	0	0	0	1
短大	4	3	4	4	15
専門学校	2	1	3	1	7
無回答	6	6	3	12	27
計	199	199	199	199	796

志望校判定状況(42回生2年7月)

分類	第一志望	第二志望	第三志望	第四志望	計
A	2	5	13	34	54
B	5	18	16	41	80
C	30	42	39	46	157
D	44	52	54	35	185
E	112	76	74	31	293
無回答	6	6	3	12	27
計	199	199	199	199	796

全志望E判定の者 13 名

模試総括

復習！！

というよりも。受験した日以外に振り返ることができるよう、問題・解答用紙・解説等を綴じたファイルを作ろう。

振り返りをすることが一番ですが、まずはいつでも問題等を、目にするようにするだけでも全然違います。

国語をよむ

- 評論**
平均点が、全国より 0.6 点高い。やや長い問題文でも、短い時間で内容を把握する力は徐々に伸びている。ただ、問 4、5 の記述問題がどの程度文章にまとめられたか気になる。『TOP 2500』で語彙の量を増やし、週末課題の記述問題を丁寧に解答することを続けて欲しい。百字要約をすればさらに読解力は深まる。
- 小説**
平均点が、全国より 0.1 点高い。場面、人物関係は比較的把握しやすい教材だったと思う。選択問題は「感じ」で答えず、各選択肢の不備を確認しながら選ぶようにしたい。特に、小説は量も力につながる。できるだけたくさんの作品を読むこと。週末課題をやった後、解説もきちんと読み、小説を読む際の留意点を確認しておくこと。
- 古文**
平均点が、全国より 0.2 点高い。問 1 の解釈、問 3 の現代語訳は確実に正答したかった。問 2 の文法問題で失点した人は助動詞の「意味」「接続」「活用」「訳し方」をもう一度復習して欲しい。問 4、6 の記述は、比較的読みやすい問題文だけに、要素を整理して過不足なくまとめる力が要求される。週末課題の記述、現代語訳等を時間をかけて丁寧に答える学習を続けて欲しい。
- 漢文**
平均点が、全国より 0.4 点低い。やれば確実に、しかも短期間で力が伸びる科目だけに惜しい。問 1 の漢字の読み、問 3 の「受身」の書き下し文と現代語訳は確実に正答したかった。問 4 の記述問題は、主語を確認しながら丁寧に読解してまとめる必要があるため、難しかったと思う。繰り返しになるが、『漢文学習必携』の句形の例文を文単位で覚えていこう。

数学をよむ

- 一桁得点の人へ**
難しいことをするのはなく、各問い(1)をまずはクリアすることを目標にしよう。全然分らないと、決めつけてしまわない。定期考査でできた問題が解けないのは、難しいからではなくて、考査後の見直し・振り返りをしなかったり、振り返る課題に対して、答えを写すだけになってしまいがちだったりするからだだと思います。特に、文系で数学を苦手と決めつけている者は、休みの日や模試前に、完成ノートの A 問題を振り返ってみよう。
- 図を描こう**
図形と計量・図形と方程式・ベクトルの問題で、解答欄に図を少なくとも描いてから、与えられた問題内の数字を書き込んでいっていますか。今回は、図形と計量の問題が最難問でしたが、模試や入試の大問には、(1)⇒(2)⇒(3)…と問題作成者の意図する解答の流れがあります。例えば、(2)を解く前に「何故(1)を求めさせられたのか？」など、例え数秒間でも考察する習慣を身につけましょう。絵画のデッサンで、部品から描く人は多分いませんよね。合奏・合唱でも、いきなり全体練習からは始めませんよね。全体を見つめて、何を伝えたいかを考え、パートを組み立てていき、作品を完成させますよね。問題も同じです。『オチ』があって、そこへ落とすために、途中の流れを考えています。「前にヒントあり！」立ち止まってしまったときに、僅かな考察をする習慣が、問題に立ち向かう上での心の余裕を生み、論理的思考能力を向上させます。一つ壁を乗り越えたいと考える者は、この習慣付けが次の課題です。
- 計算力は平均を上回る**
式と証明・高次方程式は、1 年 3 学期に行ったので、上記した図形と計量の履修時期とはそう差がないのに、こちらは全国平均を 2 点以上上回っている。ということは、計算力が劣るわけではなく、思考を踏み出す勇気に、今はまだ欠けているのだということである。2 の話を理解し、挑戦してほしい。
- 数字をまず追うな**
2 でも述べたが、図を描くことを嫌がり、印象に残っている式に、目に入った数字を放り込んでいってしまう癖がついている者が多い。定期考査とは違い、時間に余裕がある。その分、広い目で見て代入すべき適切な場所に代入することができます。基礎の積み重ねとは、こういうことです。

授業の復習プリントなどでも、提出がノルマになってしまい、答えだけを赤ペンでの書き写しになったり、授業前に他人の解答を写す(間違いまで一字一句他人と同じ解答で提出してくる)課題にならないこと。

英語をよむ

- リスニング**
上位層(偏差値 50 以上の者)が増えている。つまりは、リスニング力が向上してきていると考えられる。しかし、油断は禁物。継続は力なり。リスニングに慣れるためには、聞こえてくる英文を一つずつ日本語に直すのではなく、英語を英語のまま理解する「英語脳」をつくるトレーニングを推奨する。比重が増す共通テストのリスニングに備えて、万全の自信をもって試験に臨んでほしい。
- 長文読解**
ほぼ全国平均並み。英語の文章に触れる機会をどんどん増やし、多種多様なトピックを英語で読んでみましょう。理想は、毎日、長文に目を通すことだが、それが厳しいと思うので、3 日に 1 つ、長文問題に取り組んでいけば 3 年になった時点で、戦う素地が身についているだろう。
- 表現**
主に並べかえ、作文を指す。今回、この分野においては全国偏差値を大きく上回っていた。考えられる理由としては、当然のことながら表現力が向上していることが挙げられるが、それ以上に、答案を見渡すと、白紙で提出している生徒がほぼ皆無に等しい。(残念ながら白紙の者もいる) 正解か不正解は別にして、英語を使って自己表現をしようとする姿勢に感銘を受けた。自分の答案を再度見直すとともに、今後も新しいことに挑戦してもらいたい。